2007年8月26日

久留米のカタルパの木

御井小学校前の大鳥居を抜けて、高速道路の下をくぐると、車道と歩道に分岐する。
その車道を２０～３０ｍ行くと、右手に大きな一本な木が目に入る。
これが話題の「カタルパ」の木である。
また、ここから200～300ｍ手前の御井小学校給食室横（小学校東側の狭い道路そば）にもカタルパの木が一本見事に生育している。
久留米では非常に珍しいと言うより、日本国内でも珍しい植物の様である。
なぜ久留米のこの地にカタルパか？

元来、カタルパ（Catalpa　Tree）（和名：アメリカキササゲ）は、1870年代（注1）に、同志社の創立者・新島襄がアメリカから種子を持ちかえり、徳富蘇峰の父（一敬、別名淇水）と蘇峰に送ったのが始まりといわれている。現在、東京大田区の山王草堂記念館のカタルパは熊本市立徳富記念館にある２代目の木から1988年（昭和６３年）に接木した３代目で、平成２年に贈られたものである。（カタルパホームページより）
　一説には、実際はマサチューセッツのキリスト教団から苗木を１００本、日本に贈られたと言う書簡が同志社大学に残されているという。
（注1）　記録によれば、新島襄は1864年6月14日（当時21歳）に函館から国外脱出し、1874年11月26日（当時31歳）帰国したと記されている。（「同志社の思想家たち」）

現在、その種から育った木が同志社をはじめ全国のいくつかの場所で育っている。
その主なものは、東京大田区大森にある山王草堂記念館、蘇峰の私塾「大江義塾」跡にある熊本市立徳富記念館、そしてその徳富記念館と日本キリスト教団熊本草葉教会から苗木を取り寄せて植樹したという同志社女子大の新島記念堂前のカタルパが有名である。
また熊本には、熊本城の一角（北方角）にある監物台樹木園（平成11年に町の「保存樹」に指定）そして植木町立菱形小学校にもカタルパの木があり、子供達に愛されている。

参考までに
山王草堂記念館は、ジャーナリストの先駆者・徳富蘇峰の居宅のあった場所である。蘇峰は、同志社に学びその恩師が新島襄という師弟関係にあって、「国民の友」の創刊者でもある。
又その弟・徳富蘆花も兄蘇峰と同じく同志社に入り，キリスト教の洗礼を受け、後に「不如帰」「自然と人生」など多くの作品を残している。

新島襄（1843～1890年）は、１８８０年（明治１３年）１１月１日博多から久留米に入り、三本松の「福ドウ屋」に投宿している。夕食後、土地の郡長・宗小二郎を訪ね、久留米の地理、人情等を聞く・・・とある。（新島襄全集5・日抄（全5：100）より）
その日記に当たる日抄の記述内容は、

この日、晩餐を終り直に該地屈指の人に逢わん事を計るとある。
〇木村三郎（注2）（老人并神官）（高良大社宮司）
〇郡長　宗小二郎（注3）

（注2）　木村三郎（別名重任（おもとう）、号は赤村）高良大社初代宮司（在任期間：1873年（明治６.4.2）～1884年（明17.12.10）
（主な経歴）
三潴郡掛赤村に居住。郡奉行。明治２年　版籍奉還、久留米藩小参事に。藩政改革、人事刷新を上申するなど真木和泉守らと共に尊王主義者の中心人物。明治６年　高良大社初代宮司兼大講義に任ぜられる。（久留米市人物誌より）

（注3）久留米人物誌には、宗小次郎とある。
三潴県郡長（御井、御原、山本の郡長）を歴任。
明治4年、廃藩置県により筑後の国は、久留米、柳川、三潴の３県となり、その後、三潴県となる。

この資料から推定されるのは、
新島襄が、明治１３年１１月１日に久留米の地を踏んでおり、その月日は高良大社の宮司をしていた木村三郎の在任期間と符合する。
この時木村三郎と会っておれば、現在、高良山の麓にあるこの木のルーツはこの時点にあると考えてもいいのではないか。

この時点の経緯を更に推測してみた。
　現在、カタルパの木がある場所はアパート（高良山アパート）があり不動産屋（千本杉の秀島不動産）の所有となっている。
以前、この場所の居住者・柏原萠氏の父（嘉津摩）の自宅であった。この木に関して、記憶のある限りを尋ねてみた。

　この場所は、もともと柏原本家の畑であったらしく、ここに居住するようになったのは、大正15年頃、分家・独立して以来だという。
　柏原家は、代代高良大社の神官であり、父親（嘉津摩）、そして祖父（亀吉）もまた高良大社の神官をしていた。この祖父と初代宮司木村三郎とがこの時期に高良大社の神職にあり、二人がとりわけ眤懇の間柄であったとすれば、新島襄から譲り受けたカタルパはこの祖父に受け継がれてこの地に植えられたのではないか。
　そして、その一本を母校である御井小学校に寄贈したとすれば、樹齢から見ても、話の辻褄は合うように思われる。
　現在、この木は小さな溝のそばにあり、道路際に立っている。昭和２２年、高良山車道が開通し、柏原家の土地を分断、そのため道路ぎりぎりになったようである。

一方、御井小学校のカタルパは、郷土史研究家山口義光さん（御井小学校スグ横に居住）に

よると、自宅前のこの木を、物心つく子供時代からずっと目にしていたとのことで70年以上若しくは１００年くらいなるだろうとの話。以前、ここには、天皇陛下の奉安殿があり、その横にあったという。

御井小学校の歴史を紐解くと、1873年（明治6年）清水小学校が設置され、1876年（明治9年）に、御井小学校に改称されている。
　この時期、柏原家の祖父（亀吉）はこの御井小学校を卒業したと思われる。
その後、1886年（明治19年）御井尋常小学校（修業年限4年義務）に改称となる

ここで、高良大社宮司竹間氏に、このカタルパの話について、全体の流れ、整合性また高良大社の神社慣習などの観点から無理はないかどうか確認した。

　もとより、高良山はこの山全体が神聖な場所であり、中でも高良大社は筑後一ノ宮として地域一帯の守り神として崇められ、同時に国家の管理が及ぶ神社であった。こういう環境下、新島襄から譲り受けたカタルパの木（種、苗？）は、外地からのものということもあって、直接神社境内への植樹は憚られたのでないかと推測される。
　そこで同じ神職にあって宮司・木村三郎と極めて親しかった柏原萠氏の祖父（亀吉）に譲り渡され、柏原家の畑に植えられたのではないか。
　しかし、畑と言っても、ここは高良山の一部であり、高良大社として受け入れられたと見てもいいのではないかとコメント頂いている。
　又、同じカタルパは、同時期に祖父（亀吉）の母校である御井小学校にも寄贈されたとすれば、自然で無理がないように思われる。

参考までに
カタルパ、アメリカキササゲとは・・・
ノウゼンカズラ科の落葉高木。中国南部原産。高さ約6メートル、樹皮は灰白色。初夏、淡黄色で暗紫斑のある大形の唇形花を多数つける。果実は莢サヤとなりササゲに似て垂下し、腎臓疾患の利尿薬とする。種子には両端に長い軟毛が密生。街路樹に用いるのは北米産の同属のアメリカキササゲ。かわらぎり。漢名、楸。書言字考節用集「梓木、キササゲ」（広辞苑より）。

最後に、
　初夏の季節に、百合の如く蘭の如く、ほのかな異国の香りを漂わせる可憐な白い花、見頃は短く花は2～3日で散ってしまうという･･･。
　この由緒ある、カタルパの話を知った人々がこの花にロマンを感じ、往時を偲ぶよすがにして頂ければ、本望の限りである。
　併せて、久留米の地から発信したカタルパの木が全国各地に広がって、公園をはじめ、学校、美術館などの公共施設のシンボルツリーにでもなれば、願ってもないことである。

　この話を纏めるに際して、柏原さんには、調査を進めて行く中で、ことのほかお手数をお

掛けし、また色々アドバイスを頂くなどご協力頂き、感謝でいっぱいである。
　併せて、シニアネット久留米会員の馬場さんをはじめとして情報を提供頂いた関係者方々にも重ねて厚くお礼を申し上げたい。

文責：赤司　俊秀
（同志社校友会久留米クラブ）

参考文献　「久留米史誌」、「久留米人物誌」（久留米市立図書館）
「御井小学校創立100年記念誌」、「御井町誌」、（御井小学校校長仲氏）
「新島襄全集5」（校友会久留米クラブ・前会長秋島氏）
「同志社の思想家たち」
「カタルパ」関連ホームページ

情報入手先（協力頂いた方々）
大石好泰氏（月刊　ぷらざ）
馬場亮二氏（シニアネット久留米会員）
小林尚子氏（シニアネット久留米会員）
弥永英治氏（シニアネット久留米会員）
柏原萠氏（カタルパの前土地所有者）（東京在住）
柏原葵亥生氏夫人（柏原本家）、
山口義光氏（郷土史研究家）
御井寺（夫人）（柏原家の菩提寺）
金子商店（隣組内の老舗商店）
高良大社（竹間宮司他）
高良山水田茶屋
御井校区公民館（鐘ヶ江主事）

情報収集・調査の進め方のアドバイス
早川紘一氏（明善高校時代の友人（同期生））

年代		新島襄	高良大社	御井小学校	柏原家
1816			木村三郎		
1843		生誕			
1858					祖父（亀吉）
1864		国外脱出			
1868	明治元年				
1871	明治4年				
1873	明治6年		初代宮司	清水小学校できる	
1874	明治7年	帰国			
1876	明治9年			御井小学校に改称	
1877	明治 10 年				
1880	明治 13 年	久留米に入る（当時37歳）	（当時64歳）		高良大社神官（当時22歳）
1884	明治 17 年		没す		
1886	明治 19 年			御井尋常小学校に改称	
1890	明治 23 年	没す			

新　島　襄

カタルパの木の花（　拡大　）

カタルパの木の花

高良山参道にあるもう一本のカタルパの木